

東京都公文書館の普及啓発(展示)事業 について

～企画展示「庁舎の歴史」を通してみた展示の在り方

東京都公文書館 史料編さん担当

瀧澤 明日香

はじめに

東京都公文書館（以下「当館」という。）は、港区海岸一丁目から世田谷区玉川を経て国分寺市に建設された新館に移転し、令和2年（2020）4月1日に開館、これにあわせて東京都公文書館条例等が施行された。同条例第2条(事業)では、「歴史公文書等の利用の促進を図るための普及活動を行うこと」が明示された。

これにより当館は、これまでの資料保存管理や閲覧利用だけでなく、展示を含む普及事業も主要業務とされ、広く開かれた施設¹へと舵を切ることとなったのである。

このことは、施設面からもうかがうことができる。新館には、展示室（常設・企画）が設置され、エントランスホールでは5台のデジタルサイネージで当館の業務等を紹介するなど、閲覧利用を目的としていない方も足を運び楽しめる環境を整備している。

現在、当館の普及事業は、展示・講演会、インターネット、刊行物によって展開しているが、本稿では条例や施設面からも環境が整ったことを機に「展示」に焦点を当てる。そして、今年度開催した当館初の企画展示「庁舎の歴史 ～新宿都庁舎開庁30周年記念展示」を通し、当館展示の在り方について考えてみたい。

1 企画展示「庁舎の歴史 ～新宿都庁舎開庁30周年記念展示」の概要

当館は、新館開館に当たり多くの方に当館を知ってもらうため、開館記念展示（所蔵資料展）の準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症対策により、開館と同時に休館となり、新館での展示²は叶わなかった。令和3年度に入りようやく企画展示の開催が可能となっ

令和3年度東京都公文書館企画展示
新宿庁舎開庁30周年記念展示
庁舎の歴史
入場無料

令和3年8月10日(火)～8月21日(土) / 9月6日(月)～9月29日(水)
休館:日曜・祝日・第三水曜日(8月18日/9月15日)
※8月21日から9月5日まで東京都23区・25区・26区・27区・28区・29区・30区・31区・32区・33区・34区・35区・36区・37区・38区・39区・40区・41区・42区・43区・44区・45区・46区・47区・48区・49区・50区・51区・52区・53区・54区・55区・56区・57区・58区・59区・60区・61区・62区・63区・64区・65区・66区・67区・68区・69区・70区・71区・72区・73区・74区・75区・76区・77区・78区・79区・80区・81区・82区・83区・84区・85区・86区・87区・88区・89区・90区・91区・92区・93区・94区・95区・96区・97区・98区・99区・100区
※東京都区部以外への入場料がかかります。
※東京都区部以外への入場料がかかります。

会場:東京都公文書館 展示室及びエントランスホール
東京都国分寺市奥町二丁目2番21号 電話:042-313-8450
東京都公文書館HP:<https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/01soumu/archives/>

チラシ（日程変更前）

たことから、本企画展示が事実上“新館初”の企画展示となった。本年は、展示期間中にオリンピックが東京で開催されることから交通混雑等を考慮し、開催期間を、前期（8月10日（火）～21日（土））、後期（9月6日（月）～29日（水））としたが、新型コロナウイルス感染症の流行により後期の日程を、10月26日（火）から12月11日（土）までとした。なお、会場は企画展示室にとどまらず、常設展示室内の展示コーナー、エントランスホールやそこに設置されたデジタルサイネージ等も活用し、展示を観覧することで、新館施設の様子を観覧者に紹介できるように配している。

本企画展示は、令和3年（2021）が、千代田区丸の内から新宿区西新宿へ都庁舎が移転してから30年目の節目の年に当たることを記念したもので、慶応4年（1868）の東京府庁開設から平成3年（1991）の新宿都庁舎開庁までを通史的に捉えた、アーカイブを担う公文書館らしい展示構成とした。

2 企画展示の内容

ここでは、企画展示室内で行われた本企画展示の各章の概要を紹介し、次に企画展示室外の展示を紹介、最後に回収したアンケート³から観覧者の意見を参考に、本企画展示の成果を検証する。

(1) 企画展示室内

メイン展示会場である企画展示室では、下記の構成で展示を行った。

- I 東京府の誕生と最初の東京府庁舎
- II 東京府が目指した煉瓦庁舎の建設
- III 東京市役所
- IV 丸の内都庁舎～シティ・ホール建設構想の軌跡～
- V 世紀の大事業～新宿都庁舎建設～

I 東京府の誕生と最初の東京府庁舎

慶応4年（1868）7月17日、明治新政府は江戸を「東京」と称する詔書を出した。これにより、江戸の町奉行所を引き継いだ市政裁判所が廃止され、東京府が置かれた。東京府庁舎は、旧大和郡山藩柳沢家の上屋敷を改修して設けた。庁舎の場所は、幸橋さいわいばしの内側（現千代田区内幸町）であり、西隣は東京府第一中学校（現都立日比谷高等学校）、北側には鹿鳴館（明治16年竣工）があった。庁舎には、「仮牢」や「吟味所」「白洲」があり、町奉行所と同様の建物構成だった。



本章では、東京府庁舎の位置関係が分かるよう、参謀本部陸軍部「五千分一東京図」（明治16・17年国土地理院）を用いて庁舎の位置と庁舎周辺の建物等の位置を示した。

また、庁舎の平面図（「幸橋内東京府庁総地絵図」都立中央図書館蔵）を紹介することにより、大名屋敷を転用した庁舎の特徴を示した。

II 東京府が目指した煉瓦庁舎の建設

明治5年（1872）、政府は東京府庁舎を文部省所管の旧津藩邸へ移すことを打診するが、府は、建物の腐朽と立地を理由に断り、鍛冶橋内の旧土佐藩邸焼跡への移転を希望した。また、江戸時代からの度重なる大火災の経験から、新庁舎を煉瓦造にする

とした。こうして、2代目東京府庁舎（煉瓦庁舎）は、明治27年（1894）7月、鍛冶橋内に建築家・妻木頼黄^{つまきよりなか}設計により竣工した。

本章では、煉瓦庁舎建築を中心に、建築に関する行政文書、妻木の人物紹介や建設過程で生み出した「妻木式構法」、庁舎の平面図等を紹介している。

本章のメインは、庁舎の建築過程を行政文書で捉えられるようにしたことである。煉瓦庁舎設計から竣工までの過程がわかる全15冊⁴の簿冊群を中心に、本展示では9冊の行政文書⁵の原本を展示した。当館がこれまで開催した展示において、この簿冊群をまとめて展示したのは初めてである。

また、妻木の人物像や、日本橋の装飾設計、横浜赤レンガ倉庫などの功績も絵葉書や写真にて紹介するとともに、建築の際使用した煉瓦と渋沢栄一との所縁も紹介した。NHK大河ドラマの主人公となっていた渋沢栄一という人物を取り入れることで、より興味を引く演出をしている。

Ⅲ 東京市役所

明治22年（1889）、市制施行により東京府の区部に東京市が誕生したが、市制特例が適用され、同31年に廃止されるまでの間、市長や市役所を置かず、府知事が市長の職務を、府職員が事務事業を行うという変則的な状況が続いた。市制特例が廃止された年の10月1日、東京市役所は、府庁舎の東半分を借りる形で発足したが、東京の発展に伴い市の事務

事業が増加、執務室が狭隘^{きょうあい}化していった。そのため市は、建物借用等を重ねていき、結果、庁舎が飽和状態に達した。こうした状況から大正期には、独立の市庁舎建設に向けた検討が始まり、昭和8年（1933）、月島4号埋立地を市役所敷地として決定した。翌年、設計案の懸賞競技が行われ、同10年には設計図もほぼ完成した。しかし、同18年戦時体制強化のため東京府・東京市を廃して東京都が発足したことで、独立庁舎の建設には至らなかった。このように本章では、市役所誕生から東京都誕生によって東京府・東京市が廃止されるまでの過程について、庁舎を通して紹介している。

この章では、「市役所開庁準備書類」明治31年（請求番号：601. D1.06）



『第1種 第二課文書類・土木・府庁舎建築二関スル書類・1～15』（内務部第二課土木掛）（請求番号：621. B8.01～15）【重要文化財】



から執務室の配置図、昭和15年（1940）の市役所案内図⁶から分散されている庁舎の様子、東京市庁舎建築懸賞競技により当選した東京市役所の設計案をパネルにして紹介した。

また、昭和20年（1945）3月9日から10日にかけて大空襲に見舞われ、東京都庁舎となった煉瓦庁舎は直撃弾を受け、焼失した。ここでは、戦後解体される煉瓦庁舎の写真や、新庁舎が完成するまでの間、日本赤十字社東京支部で執務を続けていたこともあわせて紹介している。戦災を受け解体されている煉瓦庁舎の様子をパネルにして展示したのは初めてである。なお、この写真は、当館史料編さん担当の前身である市史編纂室の職員が撮影したものである。



解体される煉瓦庁舎と仮移転先の日本赤十字東京支部

IV 丸の内都庁舎～シティ・ホール建設構想の軌跡～

戦後東京都が最初に建設した庁舎は、都議会議事堂であった。煉瓦庁舎の跡地南半分に、昭和25年（1950）竣工した。次いで議事堂の北側に隣接して丹下健三設計の第一本庁舎が同32年2月に竣工し、さらに同37年4月には第二本庁舎が竣工した。

しかし、間もなく庁舎の狭隘化^{きょうあい}や分庁舎の老朽化が問題となり、同46年に東京都本庁舎建設審議会が設置され、都庁舎のあるべき姿と位置について諮問が行われた。同54年（1979）、鈴木俊一が都知事に就任すると、庁舎問題はマイタウン構想懇談会で取り上げられ、「シティ・ホール」⁷建設が提起される。同59年4月にシティ・ホール建設審議会を設置、候補地として既にある丸の内だけでなく、新たに新宿が取り上げられるが、立地は丸の内・新宿どちらの地区も優位性が断定されず、結論を知事に委ねることとなった。知事は、同60年2月の都議会で、新宿に都庁舎、丸の内に都民ホールを中心とした一大文化センターを建設すると表明、同年10月に東京都庁の位置を定める条例が制定された。



こうして都庁舎は新宿へと移転が決定し、新都庁舎が建設された平成3年（1991）3月、丸の内都庁舎の閉庁式が行われ、庁舎は解体されたのである⁸。

この章では、旧丸の内都庁舎が分散していた様子や各庁舎の写真、第一本庁舎の模型や第一本庁舎に設置されていた岡本太郎の陶板壁画など、パネルを多用して紹介している。

ここでは、旧都庁舎を記憶している方がまだ多くいることに着目し、当時の分庁舎の写真、分散された都庁舎と、庁舎敷地を分断するように国鉄（現JR）線路が通っている様子などをパネルにして、当時を想起させる演出を行った。

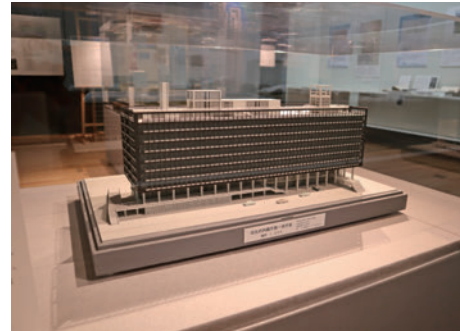
また、庁舎移転を決定した条例等の公文書を展示したが、昭和時代末期でも起案文書⁹が手書きによるものだったことに、若い世代は驚きを、相応の年齢層には懐かし

さを感じていただくという、思いがけない効果が生じた。

さらに、新宿へ移転することとなり、取り壊された丹下設計の「第一本庁舎の模型」¹⁰を展示した。この模型は、フレームや窓に本物のスチールやガラスをはめ込み、車などに色彩を施しており、以前本模型の修理を委託した際、受託者から“当時の模型としては珍しい施し”と言われた。模型にこれほどのリアリティを与えたことから、丹下が真摯にこの庁舎建設に取り組んでいたことがうかがえる。現在、この時代の丹下が手掛けた建築物の模型は少なく、本模型は貴重な資料であることを紹介した。



分散された庁舎の様子（パネル）



旧丸の内都庁舎（第一本庁舎）模型

V 世紀の大事業～新宿都庁舎建設～

東京都は、都庁舎が新宿に移転することが決定すると、新都庁舎建設の基本計画案の策定に指名設計競技方式を採用し、昭和60年（1985）10月に「東京都新都庁舎設計競技審査会」を設置した。審査会は、新都庁舎が東京の自治と文化のシンボルと位置付けられていることから、①超高層ビル建設の実績があること、②官公庁の本庁舎の実績があること、③国内及び国外で評価の高い設計者であることを基準に、国内9者¹¹の設計事務所を選定、審査の結果、丹下健三・都市・建築設計研究所¹²の設計案を採用した。丹下健三・都市・建築設計研究所は、基本設計に当たり、東京都シティ・ホール建設計画基本構想を踏まえつつ、都の関係主管局及び東京都シティ・ホール建設推進本部の各専門部会からの要望を反映して作成している。その後、環境評価書案の住民説明会や公聴会を経て実施設計が完了、工事が開始され、平成3年3月9日に落成式が執り行われた。落成式後、職員約1万3千人を対象とする大規模な移転「いちょう（移庁）作戦」¹³が実施され、同月31日に終了、4月1日に開庁した。



本企画展示のメインとなる章である。新宿都庁舎への移転は、これまで江戸・東京の中心地であった丸の内から周縁地ともいえる新宿へ移転するという、世紀の大事業といっても過言ではないことから、特に展示スペースを多く設けた。

本章では、他の章より公文書以外のモノ資料¹⁴を多用した構成となっている。

本企画展示一番の見どころとしたのも、指名設計競技9者の設計事務所から提出された新宿都庁舎の指名設計資料（設計案）¹⁵であった。展示した設計案は、各設計事

務所によってパネル形状、額の大きさ等様々であり、画一的に展示することが困難であったため、形状が大きく重量のある設計案はイーゼルを使用するなどの工夫を凝らした。

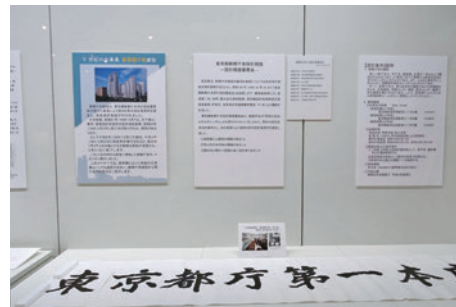
設計案からは、各設計事務所の都庁建設に賭ける意気込みが伝わり、今回すべてを紹介できたのは幸이었다。当時の応募条件の中に“著作権は設計事務所にある”としているため、展示開催に当たり、各設計事務所へ使用許可申請をしたところ、どの事務所も快く応じていただいたことに感謝したい。

また、先に取り上げた旧丸の内都庁舎（第一本庁舎）と新宿都庁舎の模型を同時に展示し、丹下建築について時代を超えて観覧することができる演出も施した。旧丸の内都庁舎では第一本庁舎のみが模型となっているが、新宿都庁舎の模型は、第一本庁舎、第二本庁舎、議会棟、広場とアートワークが忠実に再現され、鈴木が目指したシティ・ホール構想の象徴を一目で見ることができる。

また、今回、新宿都庁舎銘板「東京都庁第一本庁舎」（鈴木俊一都知事揮毫^{きごう}）を初めて公開した。これは、メディアでもよく目にする第一本庁舎の庁舎銘板の作成過程が実感できる原資料といえよう。



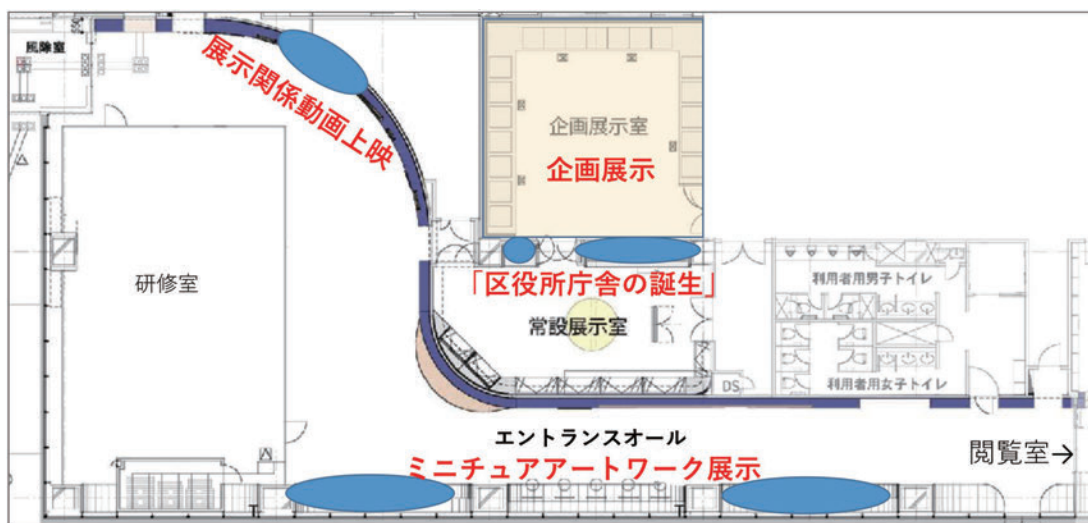
新宿都庁舎（模型）



新宿都庁舎銘板「東京都庁第一本庁舎」
（鈴木俊一揮毫）

(2) 企画展示室外の活用

次に、企画展示室以外で行った展示の概要を紹介する。企画展示室外では、図のように配置して展示を行った。

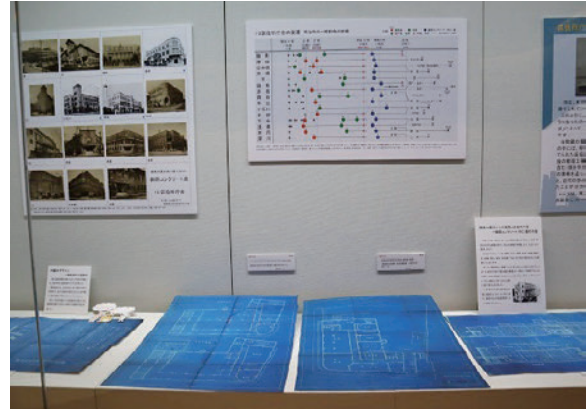


● 企画展示室外の展示

ア 常設展示室企画コーナー「区役所庁舎の誕生」

東京の行政区ごとに庁舎を建てるようになったのは、明治11年（1878）「郡区町村編制法」によって、東京が15区6郡に分けられた時が最初である。当館所蔵の重要文化財『東京府・東京市行政文書』の中には、明治時代から昭和時代前期（戦前期）に建てられた役所庁舎の新築計画・着工・竣工、開庁後の修理工事などに関する文書と図面（青焼き図面も含む）類を収めた簿冊があり、ここではこれらを用いて、東京の中心を形成した15区の区役所庁舎について紹介した。

また、区役所庁舎の設計図等を中心に、青図を多用して展示した。この青図は、紫外線等で劣化しやすい材質であるため、展示する際は、全て原寸大に複写して複製し、原資料さながらに折れやそれによる劣化、傷などを再現した。



イ 98インチディスプレイでの映像上映

上映した映像は、①旧丸の内都庁舎から新宿に移転が決定するまでの過程、指名設計競技から決定に至るまでの映像、②第二本庁舎建築過程と落成式の様子が映し出された映像、③旧丸の内都庁舎が解体される様子の映像と3本である。¹⁶ これらは、エントランスホールに設置されている98インチのディスプレイで終日上映し、IV・V章の内容を補完できるようにした。

本企画展示では、公文書と、その内容に関連する映像記録の上映及び実際に使用されたモノ資料を同時に展示することで、より一層の臨場感を与える工夫をした。例えば新都庁舎落成式については、姉妹都市関係者の招待に関する公文書と式典で行った酒樽の鏡割りで使用した木槌を展示、さらに落成式の様子が映る映像もあわせて上映した。映像には、来賓が談笑している姿や、鈴木知事らが木槌で鏡割りを行っている様子が映し出されていた。

このように、一つの事象に対し公文書、モノ資料及び映像を同時に紹介したのは、初の試みである。この試みにより、各々の持つ資料の性質等から視覚や聴覚等にも訴える効果が出せたと感じている。



映像、公文書、モノ資料（木槌）を取り入れた演出

ウ 新宿都庁舎のミニチュアアートワーク（模型）

新宿都庁舎の都民広場、ふれあい広場、議会棟及び庁舎内に設置されているアートワーク（彫刻、レリーフ等 計38点）は、新たな都庁舎を「東京の自治と文化のシンボル」とするために設置されたもので、このうち8点は、中堅や若手の芸術家の公

募作品である。公募には、作品のミニチュアアートワーク（模型）の提出が求められており、当館が所蔵するミニチュアアートワーク（模型）は、この公募で提出されたうち7点の作品である。



エントランスホールとミニチュアアートワーク（模型）

今回、これら作品を初めて公開したが、当館としては珍しい「現代アート(芸術作品)」というジャンルを展示したことになる。作品は新館の内装と調和し、芸術的な雰囲気を醸し出していた。

(3) 企画展アンケートの分析

展示期間中にアンケートを実施し、本企画展示について意見をうかがった。ここでは、これらの意見から、観覧者の反応をまとめてみたい。

【文書とモノ資料を組合せた展示に対する意見】

- ・生の起案文書や知事の揮毫文^{きごう}を見ることができて感動した。
- ・文書資料はモノ展示と比較して、難解なイメージをもたれやすいが、紙資料と写真パネルの展示バランスの良さ、また理解のアシストとして機能しているゆるキャラ¹⁷もよかった。

【文書に対する意見】

- ・都庁舎移転に至る歴史を、文書を通じて解説していて面白かった。
- ・当時の職員の苦労もあったと思うが、文書ならではのリアルさが伝わり、興味深かった。
- ・文書が多かったのも、少し難しい内容かと思ったが、実際には都庁舎の歴史がわかりやすく展示されていたと感じた。

【モノ資料及び映像資料に対する意見】

- ・現都庁のコンペ案がおもしろかった。
- ・都庁舎の移転時のビデオ放送の種類が沢山あり、面白かった。
- ・アートワークの模型など、鑑賞するのも目の保養になった。
- ・模型にひかれて来た。

【展示全体の意見】

- ・新庁舎の歴史を振りかえることができ、とても懐かしかった。もう30年経過したと思うと感慨深いものがある。
- ・資料が充実しており、内容も素晴らしい。これまであまり注目されていなかったテーマに光を当てており良い。
- ・企画展だけでなく、公文書館全体に興味を感じた。
- ・日頃敷居が高く感じられるので、このような企画を今後してほしい。

本企画展示では、都職員も観覧しており、当時、庁舎移転「いちょう（移庁）作戦」

を担当していた方から「大変興味深く、また懐かしく思いながら拝見した。」という意見や、「新宿都庁舎しか知らないが、旧丸の内都庁舎があちこち分散して大変だったと聞いており、納得した。」という意見もあった。

展示内容については、「大変良かった（71%）」「良かった（27%）」が全体の98%と、観覧者からの高評価をいただき、当館初の企画展示は概ね成功したといえよう。今後の展示について、この経験を活かした展開をしていきたいと考える。

一方、新型コロナウイルス感染症対策があったこともあり、ギャラリートークやワークショップ、子供向けのイベント等、集客を要する催しができなかった。

これまで当館の展示において、このような催しを行ったことがないことから、開催時期や周知方法などを検討しつつ、積極的に取り入れていきたい。

3 オンラインによる動画配信と講座・講演会

本企画展示では、新型コロナウイルス感染症対策のため、オンラインを活用した展示や関連講演会・講座を初めて行った。

(1) 企画展紹介動画の配信

ここでは、オンライン展示動画の構成と成果、課題点をあげる。

これまで当館の展示における動画制作は、展示を補完するために制作していることから資料を中心としており¹⁸、展示の様子も動画にする取組は初めての試みだった。

展示動画の構成は、資料を紹介するだけでなく、展示ケース越しから資料等を撮影することにより、まるで館内にて展示を観覧しているような演出も施した。まず、企画展示室に入り、展示タイトルバナーと展示会場全体を見せ、次に企画展示室内の各章の公文書等やモノ資料（指名競技の設計案、模型）を映し出し、エントランスホールのミニチュアアートワーク（模型）と進み、最後に常設展示室の「区役所庁舎の誕生」を紹介した。なお、この展開は、本企画展示の図録の構成にあわせている。

展示動画を配信した成果について、都職員から「面白かった」という感想をいただいた。また、「展示に興味があったが行けなかったのでよかった」という声もあった。

オンライン展示は、当館に足を運ぶことが困難な方にも展示をご覧いただける機会として、今後も行っていきたい。

（展示動画配信 URL：<https://www.youtube.com/watch?v=fG4e0MCva0E>）

今回の展示動画配信を通し、今後、主に課題としたい点が2点生じた。一つは、映像時間を考慮することである。YouTubeでの本動画の紹介では、「明治から平成まで、約150年に及ぶ庁舎の歴史をたどる企画展示「庁舎の歴史」そのエッセンスを13分に凝縮して紹介します。」としたが、ナレーションがない映像を約13分視聴するのは厳しく感じる方もいるだろう。令和4年1月現在で約1,000回視聴されているが、今後制作するに当たり、ナレーションを入れるのはもちろんのこと、展示内容全体を通した映像だけでなく各章毎のショート動画や展示ポイントの解説動画など、編集に工夫を凝らし、更なる視聴者獲得を目指したい。そのための方法として、他館の取組も参考にしながら、視聴者ニーズを模索することも必要だろう。もう一つは、広報である。オンラインでは多くの動画が配信されている。そんな中で、どのような広報をすれば当館の動画を選択し、視聴に至るまでにつながるか、その方法を検討していきたい。

(2) 企画展関連講演会・講座

条例改正による普及啓発を積極的に取り組んでいこうとしていた中で、一番開催しなかったのは、当館主催の講演会及び講座だった。しかし新型コロナウイルスを考慮し、受講者と対面での開催を断念、オンラインのみで開催するとした。

ここでは、それぞれの講義概要とアンケートの意見をまとめ、オンラインによる関連講演会・講座の成果をまとめる。

ア 関連講演会（令和3年8月20日（金）講師：石田潤一郎氏「明治の東京府庁舎と建築家・妻木頼黄」）

都道府県庁舎研究の第一人者である石田潤一郎氏（武庫川女子大学教授）に、京都からオンラインで御講演いただいた。石田氏はまず、旧大和郡山藩邸を転用した初代庁舎から煉瓦造の2代目府庁舎へとスケールアップするに至った社会的背景、次に、2代目府庁舎を設計した建築家・妻木頼黄つまきよりなかと東京府との関係、特に東京府が妻木に設計を依頼した経緯を当館所蔵の『東京府・東京市行政文書』（重要文化財）を読み解きながら解説された。妻木がドイツ留学からの帰国直後であったため、庁舎全体の設計デザインもその影響を受けたと考えられていたが、今回、新たに見出された府庁舎内の写真から、正面階段の天井に日本の伝統的な建築デザインがあると指摘された。そして、これが後に東京市から依頼を受け、妻木が意匠設計した日本橋の和洋折衷デザインへ繋がるという内容だった。

この講演会では、東京都在中22名、近県10名（神奈川県6名・千葉県2名・埼玉県2名）、他府県5名（愛知県・京都府・広島県・新潟県・三重県各1名）と、遠方からも受講していることが分かった。オンラインによる関連講演会・講座は、講師も受講者も遠方で参加できるということが大きな利点だろう。

イ 講座（9月17日（金）講師：当館専門員「東京府文書を読む」）

この講座では、『東京府行政文書』の中から、慶応4年（1868）の東京府開庁に際し準備した蠟燭ろうそくを立てるための燭台しょくだいと手燭てしよくに関する書類を読み解いた。書類は、和紙に墨を使ってくずし字で書かれていることから、くずし字を読むポイントをオンライン上の画面に示して説明しつつ、一字一字丁寧に読み上げた。それだけでなく、くずし字の「トメ」や「ハネ」を、講師が電子ボードを用いて実際に書きながら講義した。

また、書類の理解をより深めるために、大名屋敷を転用した庁舎ならではの採光問題と、その解消のために灯火が必要であったことなどの解説を加えている。

本講座では、事前に資料を送信している。この資料は、講義で使用する文書の画像、くずし字を読むコツである「トメ」、「ハネ」のポイントを示したものや、講座に関連する図面、絵図、現在も残っている大名屋敷の画像などを盛り込み、本講義が分かりやすくなるよう丁寧に仕上げた。

ウ アンケート

アンケートは、講義終了直後にアンケートフォームへのリンクを付したメールを送り、受講者へ協力を依頼したところ、関連講演会では約60%、講座では100%という回収率となった。関連講座では、大変良かった約60%、良かった約38%、講座では、大変良かった約42%、良かった約50%と、高い評価だった。

企画当初、オンラインを使用することに不慣れな方もいるかと心配していたが、「ほ

ば問題なく視聴できた」との回答が多かった。講義内容については、「内容が非常に面白かった。府県庁舎の平面計画の変遷もよく分かったし、妻木論も非常によく理解できた。さすが石田先生」「くずし字の読み方の基礎にとどまらず、文化的な背景など文書の読み解き方までの多彩な内容で興味深く拝聴した。」など、非常に高い評価をいただいた。

ではここで、講義内容以外の感想をいくつか紹介する。

- ・WEB講演会は、遠隔地でも気軽に参加できるため今後もぜひ開催してほしい。『都史資料集成』のテーマを1つずつ取り上げたり、人物に焦点を当てたり、あるいは史料の保管や整理などアーカイブ的な内容についても聞いてみたい。
- ・Facebookで紹介しているような興味深い史料を取り上げながら解説するWEB展示会のような企画もあればぜひ参加したい。
- ・オンライン限定のみではなく、対面との併用でもよいと思う。
- ・事前に送られた資料が充実していたのがよかった。

初めてのオンライン講演会・講座における成果としては、講座開催に当たり、古文書の読み方を初心者でもわかるよう丁寧に作成した資料を、事前に送信したことだろう。この作業が評価につながったのは、大変ありがたく、今後もこのような資料作成を心がけたい。また、この関連講演会・講座では、事前に入念なシミュレーションを重ねたため、初めての開催であったにもかかわらずスムーズな進行ができたことは、今後開催するに当たり自信へとつながった。また、オンラインと対面と併用を希望する意見は参考となり、検討していきたい。

4 公文書館における普及事業の課題～ポスト・コロナ時代を見据えて

本稿では、当館の新館移転後初となる企画展について、その内容と成果について紹介してきた。またこの分析は、同時に新型コロナ禍の取組を通し、ポスト・コロナ時代に継承すべき事柄を浮き彫りにすることともなった。

ここでは、企画展示「庁舎の歴史～新宿都庁開庁30周年記念展示」の開催から導き出せる、公文書館における普及事業の課題と展望を整理していこう。

(1) モノ資料の援用

本企画展示では、公文書等の紙資料・文字資料に加えて、模型やパネルといったモノ資料を積極的に活用した。当然、公文書館展示の主役は公文書等であるし、博物館ではない以上、モノ資料のための収納スペースも限られている。しかし、移管される公文書等と密接な関連を有したモノ資料は、自治体等の歴史を物語る重要な素材となり得ることが、本企画展示を通して明らかとなった。各自治体にとって重要なイベントや事案に関わるモノ資料は、重要な資料として引継ぎ、移管文書との関連に留意しつつ保存し、折を見て展示その他の普及事業に利活用していく。

(2) 映像資料の活用

本企画展示開催期間中に上映した映像資料は、いずれも東京都あるいは都庁内の組織が企画・制作した行政資料といえる。しかし、当時の媒体のままでは視聴、上映に困難があることなどから有効活用できずにいた。今回は、企画展示のテーマに即応した内容のものを選定しデジタル化の上利用した。映像で見る数十年前の東京都庁の様子は、先

述したとおり、観覧者に強い印象を残した。行政が行政的観点で作成した映像資料が、一定の年限を経て貴重な歴史資料としての価値を付加するという事に気づかされた。

今後、多様な媒体の映像資料の活用について、オンライン配信を含め検討を進めていきたい。

(3) オンライン配信が開く可能性

新型コロナウイルスの影響で多くの制約を余儀なくされた本企画展示であったが、実際に足を運ばずに展示の概要だけでも知ってもらいたい、また対面式の講座が開催できない状況下でも講演会・講座にて参加してもらいたいとの思いから、オンラインによる展示動画及び講演会・講座の配信を実施した。今回は、感染症対策としての取組として行ったが、地理的制約・時間的制約を取り払って、より多くの視聴者を獲得できることを踏まえると、感染症収束後の普及事業にも何らかの形で継承していくべきであろう。

今後は、短い時間でいかに展示内容を魅力的に伝える映像を制作するか、ギャラリートークや対面式の講座などを実況中継のような形でオンラインでも配信できないか等、公文書館の普及事業をより効果的なものとしていくための検討課題を明確にし、事業展開に活かしていきたい。

おわりに

令和2年4月の新館開館以来、当館の普及事業の中心となる展示、講座・講演会はそのほとんどが中止となってきた。本稿では、ようやく開催できた本企画展示とその関連講座・講演会の取組から、成果と課題を検討してきた。

新型コロナウイルスが収束した後は、より一層開かれた公文書館を実現するための機会作りが求められるだろう。例えば、展示に伴うワークショップ、親子で参加できるような企画、小中学校の見学会なども考えたい。また、様々な制約がなくなれば、都内区市町村との連携も活発化できる。

本企画展示を通し、制約の下で培った新たな展示の方法や視覚を、これからの普及事業の展開に活かしていきたい。

多くの資料保存利用機関においてもこの数年間、厳しい環境での普及事業を行ってこられたと思う。本稿の内容が、それら機関の今後の事業について参考となれば幸いである。

1 東京都公文書館条例に基づき「公の施設」となった。

2 当館内での展示はできなかったが、公益財団法人特別区協議会との共催展示で同内容の展示を開催した。については、『東京都公文書館調査研究年報』2020年第7号 瀧澤明日香「【展示紹介】公益財団法人特別区協議会共催パネル展「守る・伝える 東京のアーカイブズ～東京都公文書館所蔵資料の成り立ち」にて展示内容を紹介している。

3 新型コロナウイルス感染症対策により、後期（10月26日～12月11日）のみを対象にアンケートを行った。

4 『第1種 第二課文書類別・土木・府庁舎建築ニ関スル書類・1～15・〈内務部第二課土木掛〉』（請求番号：621. B8. 01～15）【重要文化財】

5 II章で展示した行政文書9冊は以下のとおりである。

「議場の図」「件名：第64号 明治26年6月14日 連第282号 府会議事堂内部配置の件（延期）」『常置委員諮問会筆記・乙号ノ7 〈常置委員会〉従明治25年2月至明治27年1月』（請求番号：620. A5.03）【重要文化財】

「明治22年1月21日送達 庁舎建築工事を囑託す 臨時建築局四等技師 妻木頼黄」『第1種 秘書*進退原議・

官吏命令・郡区吏雇・郡区吏命令・冊ノ4』(請求番号：601. B3.21)【重要文化財】

『第1種 第二課文書類・土木・府庁舎建築ニ関スル書類・1～15 ・(内務部第二課土木掛)』(請求番号：621. B8.01～15)【重要文化財】のうち、以下の文書を展示した。

- ・「(府政新報附録) 新東京府庁舎略図」『府庁舎建築ニ関スル書類・1・自1至42』(請求番号：621. B8.01)
 - ・①「昇降口模様換に付足し石買上費 青木庄太郎」『府庁舎建築ニ関スル書類・4・自88至94』(請求番号：621. B8.04)
 - ・②「屋根明取硝子受木棟包銅張費 山田信介」『府庁舎建築ニ関スル書類・8・自162至185』(請求番号：621. B8.08)
 - ・「正面昇降口上時計新設費 小林伝次郎」『府庁舎建築ニ関スル書類・12・自261至282』(請求番号：621. B8.12)
 - ・「内部大階段其他石拵付費 谷村小作」『府庁舎建築ニ関スル書類・13・自283至308』(請求番号：621. B8.13)
- 「府庁舎建築費中煉瓦積繫鉄物買上費支出(連第112号)」『課別第1種 府会議録・常置委員会諮問・郡区連帯(第一課) 明治25年度』(請求番号：619. C7.07)【重要文化財】

なお、①②は期間中、展示入替えをしている。

- 6 東京市役所「市の施設案内」昭和15年(請求番号：市刊K41)
- 7 マイタウン構想懇談会から「シティ・ホール建設構想(昭和55年)が提案され、昭和57年に「東京都シティ・ホール建設構想懇談会」を設置。翌年、その懇談会で提出された報告書では、シティ・ホールとは以下のとおりとした。
「シティ・ホールは、単なる庁舎ではなく、都民の交流の場であり、文化の創造の中心として、ふるさと東京のシンボル、東京の自治のシンボル、国際都市東京のシンボルとなるもの。」と性格づけている。また、シティ・ホールの基本機能として、行政機能、文化機能、ひろば機能が必要であり、それぞれの機能に対応する施設は、議会棟を含む本庁舎、都民ホール、広場であるとした。(財務局『新都庁建築誌』平成4年3月(請求番号：財務F91) p.11)
- 8 昭和50年(1975)に竣工された第三庁舎は、解体されず、令和4年現在も利用している。
- 9 平成5年まで起案用紙の形状はB5判だったが、平成6年4月1日「東京都公印規程の一部を改正する規則」により、様式サイズをA4判に改めた。現在、紙で起案する場合はA4判を使用しているが、電子による起案が主体である。
- 10 旧丸の内都庁舎「第一本庁舎」模型は、令和3年10月23日(土)から令和4年1月16日(日)まで開催の川崎市岡本太郎美術館「戦後で財運動の原点 デザインコミッティーの人々とその軌跡」にて展示することとなっていた。そのため、当館の展示では、前期は原資料(模型)を展示したが、後期は日程変更をしたことにより、模型を動画撮影して映像展示に切替えた。
- 11 選定された設計事務所(昭和61年当時の名称)は以下のとおりである。(順位は当時の審査記号順)
A：日本設計事務所 B：前川國男建築設計事務所 C：坂倉建築研究所東京事務所 D：山下設計 E：松田平田坂本設計事務所 F：磯崎新アトリエ G：安井建築設計事務所東京事務所 H：丹下健三・都市・建築設計事務所 I：日建設計東京支社
- 12 現在の社名は「株式会社丹下都市建築設計」
- 13 新宿都庁舎の移転では、職員の理解と意欲高揚、都民への効果的なPRを目的として移転のためのネーミングを職員から募集し、「いちよう(移庁)作戦」となった。
- 14 本稿では、“狭義の公文書に当てはまらず、多様な形態を持った資料”であり、閲覧に供するのは困難なため、展示利用を中心として取り扱う資料について、便宜的に「モノ資料」と呼ぶ。本稿におけるモノ資料は、以下のとおりとする。
・指名設計競技で提案された各設計事務所の設計案(パネル等)・旧丸の内都庁舎(都庁第一本庁舎)の模型、新宿都庁舎の模型、クライミングクレーンJCC-900H型模型・鈴木俊一揮毫「東京都庁第一本庁舎」・落成式の鏡割りで使用した木槌・ミニチュアアートワーク(模型)
- 15 本企画展示でメインとした各設計事務所の設計案(パネル等)は、見方によっては収受文書に当たるかもしれないが、本企画展示では上記14に基づきモノ資料と位置付けた。これら資料は、新宿都庁舎へ移転して以来、都庁舎内の暗所で保存されていたものだったが、新宿移転に関する歴史的に貴重な資料として、平成31年(2019)に受入れたものである。今回、新宿へ移転してから30年の時を経て初めて公開した。
- 16 上映した動画
 - ①「21世紀にむかって 一新都庁舎の建設」企画：財務局シティホール建設準備室 制作：東京都映画協会
 - ②「東京都庁第二本庁舎 一建設の記録」監修：東京都、丹下健三・都市・建築設計事務所 企画：東京都第二本庁

舎建設共同体 製作：カジマビジョン ※著作権の関係から②は後期のみ上映

③「職員のひろば 一消えゆく旧都庁舎一」東京都

17 当館の展示は、常設展示、企画展示共に「道先案内人」と称したキャラクター（ネコ、ウサギ、タヌキ）が展示の豆知識等を紹介している。

18 本企画展示以前、当館で制作した主な動画

- ・企画展示「延遼館の時代 明治ニッポンおもてなし事始め」平成27年制作 ※都庁第一本庁舎南側展望室にて同タイトルの展示の際、延遼館の役割等を紹介した。
- ・企画展示「戦時下の東京 一文書が伝える戦争の時代」平成27年制作 ※東京市作成の金属原盤レコードの音声（東京市長大久保留次郎肉声「紀元二千七百年の帝都市民に贈るの辞（上）」等）と関連画像を取り入れて構成
- ・企画展示のため当館所蔵の文化スライドを動画にしたもの。スライドに付随する台本を読み上げたナレーションを付けている。

※当館デジタルアーカイブにて視聴可能 https://dasasp03.i-repository.net/il/meta_pub/sresult

企画展示「東京 1945 - 1954 / 「文化スライド」にみる東京～昭和20年代」平成28年制作

「東京の観光」東京都文化スライド第12輯 昭和28年5月

「清ちゃん街を行く」東京都文化スライド第22輯 昭和29年3月

「東京の農業」東京都文化スライド第29輯 昭和29年11月

企画展示「変わる東京―「文化スライド」が写した昭和30年代」平成29年制作

「ぼくの家工場」東京都文化スライド第84輯 昭和34年6月

「近づく東京オリンピック」東京都広報スライド特集 昭和38年11月

- ・企画展示「変わる東京―「文化スライド」が写した昭和30年代」平成29年制作 ※原資料は16ミリフィルム。当館デジタルアーカイブにて視聴可能 https://dasasp03.i-repository.net/il/meta_pub/sresult

「復興のアルバム」昭和31年 建設局制作

- ・企画展示「東京150年 ～公文書と絵図が語る首都東京の歴史」平成30年制作 ※東京の通史を捉えた動画

19 東京都公文書館『令和3年度東京都公文書館企画展示「庁舎の歴史 ～新宿庁舎30周年記念展示」』令和3年